

発達心理学からみた子どもの問題

講演 広島文教女子大学文学部教授 秋 山 幹 男

主催 広島文教女子大学教育相談センター

期日 平成6年10月29日 聴講者107人

今日はいろんな人がいらっしやるので、違った形から話に入ります。ここに沢山の本が積み上げてあります。こういう本を用意しないと、話ができないと思われるでしょう。読まなければならぬと思って、これだけの本を机の上に並べておくと、これはストレスが溜まります。もちろん短期間に全部読めるものではありません。この状態に入ると、ある意味で不登校の子どもの気持ちになるのです。どういうことかと言えば、やらなければならないことが一杯ある。ところができなくなる。どんどん日が経って、今日の日を迎える。迎えてしまって、私はここに来ているわけですが、もし私がここに来れなかったら、どういうことを言われるでしょうか。不登校者と言われます。

「〇〇までに、これだけのものをやらなければならない」というノルマが、ここにはあります。私はこういう人生を歩んできて、今51歳になりました。ただし、これだけのものをすぐにやろうとしたら、それはとてもできません。これらの本は昔一度は読んでいます。〇からやろうと思ったら、これはすごくしんどいことです。また無理でしょう。日常生活においては、他にやらなければならない事が一杯あるからです。ここで私は、これだけのものがあるんだけど、読んだ内容についても忘れていく方が多いけれど、でも、これはあきらめよう。あきらめて、私の時間をつくる。そしたら、私はそれなりの準備ができ、出かけてくることもできる。「私はこれだけのものを、やらなくてはいけない」と決めた自分をあきらめて、できる範囲のものでやろうかと、開き直ったところの心の余裕が、何だろうか。私はこの心のリズムを作るために、時間をかけてきたのではないかと思います。それは、中学・高校の時の自分を振り返ってみても、完全主義者でしたから、完全に何かをやらなければいけないと思いこんでいた。あの頃はできることもありました。試験の範囲が少なかったからです。ところが、大学に入ると、学んだことが半年とか一年単位で溜まる。そうになると、一夜漬では消化できない。どうするか、実にいろんなことを考えながら生きてきました。

私が心理学を学び始めたのは、昭和37年（1962年）ですから、今から33年前です。まず、ネズミと一緒に8年間生活を共にしました。そのうち、「だんだんと顔がネズミに似てきた」と先生に言われ、“君、そろそろネズミではなく、人間をやってみたら”という無言の圧力を肩に感じたとき、この大学に赴任しました。ここに来て23年目になります。私がここで今やっている対象は確かに人間です。最初は幼児教育学科に所属していましたので、相手は小さな子どもでした。ところが、子どもをどう育てるかということで、一所懸命頑張ったんですが、これがそう簡単には分からない

んですね。では、どうやって頑張ってこれたかと言えば、2つのチャンスをつかったのです。まず、児童相談所の嘱託員になりました。広島中央児相ですから、広島のおちこちを回らしてもらいました。そこで診断をし、コメントを加え、報告書を書くのです。この作業をやって随分と勉強になりました。3歳児の子どもとそのお母さんに関わっていくのですが、時々お婆ちゃんも来るし、お父さんもこられます。その中で私は、沢山の方々との触れ合いを持ったわけです。私がこの大学でやっている授業は、発達心理学が中心ですから、ネズミの話だけではどうにもなりません。そこで泣きたい思いをしながらの予習の毎日でした。さらに悪いことに、私なりの人間を対象にした研究法がまったくないのです。だから、次には附属幼稚園に出かけて行って、遊んでもらったわけです。子ども達（園児）からは、ジャンケン叔父さんとか、秘密のおもちゃの部屋の先生とか、叔父ちゃん先生といった名前をつけて貰って、一緒に遊びかつ観察・実験をしていきました。不思議なことに、私の中には子どもと遊ぶ力（能力）がまだ残っておりまして。こういった2つの実践の蓄積をしながら、私は発達のテーマをつかんだのです。私が狙っていたのは、“人間とはどのように生きていくのか”とか、“私とは一体何者なのだろうか”という事でした。これが、いつの頃からかライフワーク化し始めてきました。

前置きが長くなりました。これからは、「発達」ということについての話を致しましょう。

1. 「発達」をどう捉えるべきか

配布資料 その1

- 1) 1960年代にスタートした新しい発達観とはどういうものだったのか
- 2) 成長という事実と「発達」という概念との関連について
- 3) 科学的に明らかにされた心理学的諸事実は、直接日常生活に活用できるものなのか
- 4) 結果と解釈の問題について：①ヒルティの言葉 ②うつ病患者のプレッシャー
- 5) 平均的世界（統計）をベースにした「偏差値」教育についての素朴な疑問
- 6) 「発達」をあなたならどうイメージ化するか

1960年代の頃に、教育の世界は大きな渦が巻きはじめました。研究分野では、それよりも40年位前からいろいろな発達の事実が発見されていた。1920～1930年代からですが、スイスではピアジェが、ソ連ではヴィゴツキーが研究を始めていたのです。この60年代に何が言われだしたかという、発達観ががらりと変わったんです。それまでの発達観は、ある程度その面の発達が出来上がらないと、教育してもだめだと言うものでした。これが伝統的な発達観で、アメリカの小児科医のゲゼル達が主張していました。いくら早く仕掛けても、その面の発達の芽が出ていなければ、教えても無駄という考え方です。しかし、ソ連ではその逆をやり出しました。その根拠は1920～30年代からあっ

たわけで、「教育は発達を促進する」というのです。だから、教えることによって、子どもの持っている発達能力は、先に芽を開くと考えたのです。これでもって、多分環境優位説が芽をふいた。だから、『どんな子どもでも、やれば伸びるんだ。環境さえ整えれば』ということになっていった。確かにどんな子どもでも伸びるんです。可能性を持っていますから。だけれども、その伸ばせ方については、一体何をどう考えたかという、私は余り深くは考えてなかったのではないかと思います。私たちが取り込んでしまったのは、多分言葉（用語）だけではなかったのか。どんどん教育の意味が大きく膨らんできて、発達の先をやるんだということになりだした。言葉で書いたら、初期教育、早期教育の問題です。早期教育とは何かというときに、その意味を深く考えないで、言葉だけが一人歩きを始めた。それは、小学校教育の先取りを幼稚園でやるというように解釈されてしまった。本当はそうではないのに、そうになってしまい、どんどんそれが拡大されてしまった。そこで、次の2) 成長という事実と「発達」という概念との関連が浮上してきます。

私たちが日常生活のなかで目にするものは一体何か。それは、その子どもの一つ一つの成長の事実が目に見えるんです。あ、立って歩いたとか、ああ、何か今話したかね。やあ、走った、と分かるんです。だが、それがどういう形で、どういう発達になるのか誰にも分からない。歩くこと、走ること、けつまずいて倒れること、倒れて手をつくことが、何になるのかは分からない。それは、心理学だったら、運動の発達とか書いてあります。

でも、それは、振り返ってみればそのように言うだけで、私達が身の回りで毎日接している子どもたちにとっては、一つ一つの成長の事実が目に見えるだけです。それがどういう発達になるかというのは、適当に括ってあるだけなんです。そこには、いろんなものの時間の流れがあって、時間の流れをまとめて振り返って見ると、ああ、あれとあれとあれは、これに繋がっていたと分かる。それが、子どもの知的な能力を刺激することであったかもしれない。何でけつまずいて、頭で

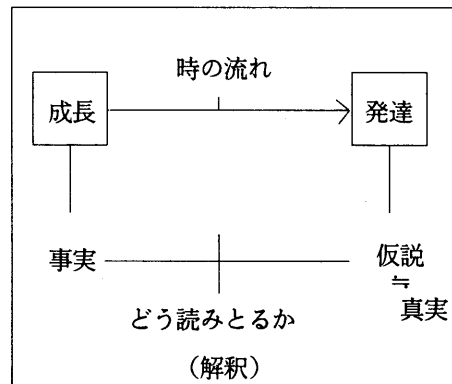


図1

ぽんと倒れないで手をついて倒れたかということも、脳の機能、運動機能だけではなくて、知的能力をも表すということは、後から分かる。このように考えてくると、私達が目にしているものは、目に見えるものは、子ども達の成長の事実でしかない。その積み重ねが時間の流れのなかで溜まってくると、眼では捉えられなかった発達が見えてくると、私は考えたわけです。この考え方は、私を楽にしました。どういう訳かという、成長は私達が目にできる、手にできる子どもの事実なんです。そういったものを、発達という仮説のなかで、私達はどう読み取っていくのか、どう解釈するかということなのです。今日も目の前で自分の子どもが何かをした。学校でこの子は何かをして

るわけなんです。これらが何に結びついていくかは、本人には分かっていない。でもそれが分かっているというか、かなり独断的になりやすいけれど、ある程度分かるのは大人の側ですね。だから、大人の側はそれを見て喜んだり、不安になりながら、次のことを仕掛けつつ、じっと様子を見守っているわけです。それが喜びの中で観ている場合と、不安とか恐れの中で観ている場合がある。こういった状況の中で、私達は子どもの一日一日を、自分の一日一日に重ね合わせて生きているわけです。さて、このように考えてくると私達が立てる仮説、こうじゃなかろうかなと思う発達、目には見えない発達というもの（真実に近ければ近いほどいいことなのですが）、本当に真実であるかどうかは誰にも分からない。ただし、分からないといっても、私達には文化があるから、その社会が積み上げてきたものはあるわけです。さて、これをどう活用するかです。さあ、ここまで来ました。いよいよ3番目です。

科学的に明らかにされた心理学の諸事実というものは、一口に言えば、事実の寄せ集めなんです。先にあげた点に繋げると、知的発達とか、情緒の発達とか、意欲の発達とか、運動の発達とか一杯ありますね。この研究は、子ども達を細切れにしてというのはおかしな言い方ですが、その発達の一側面だけに絞って、じっくり観察したり研究したりした成果なのです。一つの事象を取り上げて積み上げられた研究だから、ピアジェは思考の発達で成功したんですね。ところが、そのピアジェが情緒をからませて追究していたら、混乱して研究は見えにくくなったでしょう。こういった積み上げから出来てきた心理学の成果というものを、そのまま生の日常生活に持ち込んだらそれは大変なことになります。だって、断片的に発見された事実というものを、目の前の子どもに当てはめようとするのですから。子どもが小さければ小さいほど、幼児期に近ければ近いほど、子ども達はでこぼこなんです。3歳児検診で分かったことですが、「うちの子どもは三輪車に乗れません、どうしたら良いでしょうか」と言われました。そんなことを言われても、見たこともないし分からない。よく聞いていたら、本ばかり読んでいて外に出ないということでした。三輪車に乗ることも無かったわけです。逆も真なりです。「うちの子は外でばかり遊んで、本を読まないのです。……」と言ったら、寝ている時かご飯を食べている時以外は一日中外で遊んでいるのだから、本を読む時間はないのです。でこぼこの発達を個々人はしているのに、育児書などを見ると何歳ではこうだと書いてある。うちの子と比べてみたら、成っていないわけです。このように受け止めてみると、目の前の事実のなかに、喜びと不安と驚きと、そしてドキドキがあるのです。このように成長しながら自分達大人は大きくなってきたのです。今の子ども達だってそうなんです。私達大人は、心理学的事実を持って来て、それに当てはめながら子ども達を観るときには、良いところは注目しない、出来て当たり前だから。気になるところはボーッと出てくるから、拡大解釈をして慌てる。それを直に当てはめられた子どもはつらかろうと思います。よく耐えているナーッと思います。さてここですね。いろんな発達があるが、その発達は何に繋がるのかというと、私が皆さんがどうやって自分の一生を過ごすか、つまり、自分の人間性の発達ということになるのです。人間性の発達を

観るためには、知的発達とか情緒の発達が、どのように取り込まれ融合されていくかということが大切なんです。このことは、人が一生を過ごしてみても、死ぬ時に初めて分かる。でも、死んだ方は何も教えて下しませんから分らないのです。だから、自分で歩みつつ学び取っていく以外に道はないのです。

少し視点をかえて、4) 結果と解釈の問題について、2つの話をしてみたいと思います。まず①ヒルティの言葉です。これは北海道の私立女子高校の教員をしておられた、西田真正先生の本に書かれていたものです。「例えば、毎日2回ずつ入浴する人があるとしましょう。我々は、その人が毎日2回ずつ入浴する人だと言わなければならない。なぜならば、何故彼が2回ずつ入浴するのか、その理由を知らずしてどうして彼を非難できるのか」というものです。この背景として、西田先生の本にはイエス＝キリストの話が併記されてありました。彼は、ある罪を犯した女性が、石投げの刑に処せられようとしている場に連れていかれた。その時、彼は、「石を投げられる人は投げてごらん。ただし、その人は絶対一度も罪を犯したことの無い人だ」と言われたのです。結局誰一人投げなかった。もちろん、キリストも投げなかったんですね。これを受けて考えてみましょう。結果は確かにある。その結果をどう解釈するかという時に、私達はどう解釈すべきか、どう読み取るかということになるのですが、それを読み取る時に、間違っていて読み取ることが多いのではないかと。自分なりのものの考え方・受け止め方があるからです。この自分なりの基準に当てはめてものを考える。さっきの話で言えば、育児書です。これに当てはめて観ると、自分の子どもたちにどんどん問題が出てくる。その書かれてある時期を過ぎても、その能力が現れてこない、その焦りはどんどん大きくなっていくという問題なのです。幼児よりも中学・高校に行っているお嬢さんや息子さんは、もっと毎日の生活を積み重ねているわけですね。そこで、目の前で起きている結果を、どう考えどう読み取るかという時に、その気持ちをどう持つかということに関わってくるわけです。このところを、これから聞いていただきたいと思います。次に、②うつ病患者のプレッシャーについて話しましょう。大人になると、真面目な人がよくなります。身内の人にうつ病になった人がいるとします。見舞いに行くと、その人にやっぱり労いの気持ちを伝えなければというので声をかける。「頑張って下さいね」「早く元気になってね」と。これが一番彼にとってはプレッシャーなのです。そうなれないから今倒れているのではないのか。無理をして頑張って来たから疲れ切っているのです。うつ病患者のプレッシャーは、私達大人だから分かる面もあります。ところが、不登校、いじめにあっている子どもの心が読み取れない。その時に、言葉だけで「しっかりせいや」と言っても、当の本人はどうしていいのかさっぱり分からない。どうしていいか分からないので行き詰まっているその子を、どう理解すればよいのでしょうか。そういう状況の時に、激励する言葉はもういやになる位、皆がやってるんです。ここ10年、20年くらい。でも、それで良い方向へ向かったかということ、ならない方が多かった。で

はどうしたらよいのでしょうか。そこでヒルティの言葉を思い起こすべきです。私達大人は、その原因をしっかりと掴むことです。では、どうして掴むか。その悩んでいる本人には分からないその心の動きに目を止めるのです。私達には少しは分かるはずですが、自分もそのような子ども体験をしてきているからです。

資料5)には、『平均的世界(統計)をベースにした「偏差値」教育についての素朴な疑問』と書いてあります。偏差値が70以上はすごいとか、50は普通だとか、40は悪いとよく言われる。それ

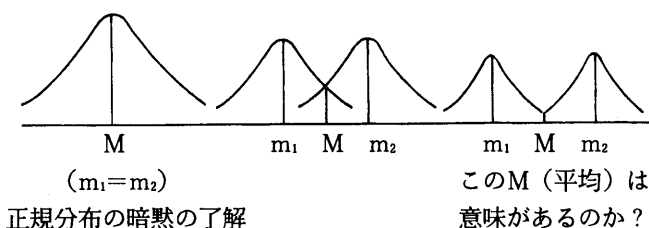


図2

でもって塾は振り分ける。学校も一所懸命振り分けた。私の子どももやられましたよ。泣きたい思いもしました。さて、このことを統計法で言ったら、図2の左図が偏差値を出すベースです。つまり正規分布が暗黙の了解なのです。こんなに綺麗につり鐘状になることはめずらしく、身長とか体重といっ

た何十万人もデーターをとる場合にはこうなります。Mは平均値のことで、偏差値50を決める値です。右の図に行きますと、山が二つにずれている。 m_1 と m_2 が出ています。これは何を意味するか。ここでは子どもが二つに分かれている。好きな言葉ではありませんが、この図は良くできる子と、あまりできない子に分かれている。しかし、その真ん中にも人はいる。そこがダブっているところで、そのところに全体のMがある。右端の図は、二つの山が全く離れてしまっています。しかし、平均をとるとやはり真ん中にMは落ちるのです。実はこの真ん中には誰もいないんです。

良くできる子と、できない子が完全に分離している。この場合に取り出した平均値(M)というのは、何の意味があるのでしょうかね。現実の世界がこうなっていったら、どうなるのかなぁと言うのが、私の素朴なイメージなんです。このように考えてくると、何か理解できるものも沢山あるなと思います。右端にあるような状況は、補習塾と進学塾とかね。 m_1 m_2 には意味が生じるが、しかし、Mの意味はない。さて、この素朴な疑問はこれ位にしておいて、もう少しつけ加えておきたいことがあります。

ここに河合隼雄先生の「子どもと学校」という本があります。この中に帰国子女の問題が取り上げてあります。今は、親子連れで海外に出かけ、そこで生活をして再び日本に帰って来ます。この本に書いてあるのは、アメリカで5才から15才まで生活し、中学3年の時日本に帰って来た男の子の話です。アメリカの教育は自己主張させるんですね。授業に貢献する貢献度の高い子がいいんです。ところが、それをその子は日本に帰ってもやったのです。一所懸命に学校の先生の授業に貢献しようと思って言うでしょう。ところがです、発言するたびにガクッという反応が返ってくる。教

室中がバァーッとなって、「お前浮いている」と言われる。先生に対していろいろ発言すると、先生も「授業に関係のないことは言うな」とこうです。自分では授業と関係あると考えて貢献しようとしているのにそう言われ続け、ガク、ガク、ガクと反応されたのです。一体何をしたらいいのか。この延長にあるものは、ある意味でのいじめであり、不登校の原因になるかもしれない。この話を聞いた高校の先生がいて、自分のクラスの生徒に投げかけた。“国際化の社会に私達はどう生きるべきか”とよく言いますね。それは何処で言っているのかといえば、頭の中だけで言っている。体を通して言っているわけではない。この先生は、クラスに投げかけて討論にもちこんだ。そして、自分達もそうだと気付くんですね。つまり、子ども自身が気付くのです。高校生位になれば何かが分かる。先生もそこに気が付いていたから仕掛けた。このところに何かが一つある。それから、ある日突然学校に行けなくなった生徒がいた場合、どうしてなのかなと聞いた時に二つ目があります。行けなくなった時、病気それも、精神的な病気かも知れない。もしこの可能性があったら困るので、まずこれは押さえておきますよね。でも、それだけではないんです。『引きこもり』ということですが、必要な引きこもりということもあるのです。その子が、自分の何かに気付いて、その何かのために学校へ行けなくなることがあるのではないか。それがもしあった場合、それを私達がどう受け止めるかです。河合先生の言葉を使えば、「病には意味がある」ということです。だから、不登校の子どもの必要な引きこもりという感じも、大きな意味があるのかもしれないと考えていけば、何らかの対処ができるかもしれません。

それから、思春期になった子ども達と、差しで向かい合った人がいます。それは、小学生の子どもを半年間もいじめていたわけです。そこでとうとう親が出ていった。まず、母親が出ていったら、けんもほろろにやりこめられた。それは強いですよ、中学生のパワーの方が。その次の日に父親が出ていった。その時のやり取りは、理由がよくわからないので、まずは相手の中学生の気持を受け入れて、“小学3年生が中学生に向かっていったら、生意気なやつと思うやろな”と言ったそうです。そうすると、ストレートに本音が出た。「そうよ、くそ生意気なやつらや」ずうっとそのようにやり合っていくながら、その内にそのお父さんが擱んだことは、“一寸待て、あんたらは5・6人で取り囲んで小学生を殴ったり蹴ったりしただろう”ということになった。その後、“この事については、学校には言っていない。私はあなた達を信用して来たんだ”と、その人は言われたそうです。この一事でいじめは無くなった。一体何が起こったんですかね。学校の方には言っていない、男と男の約束とのお父さんが話しても、すぐには信じなかったのではないのでしょうか。それが一日、二日、三日と経っても、学校の方からは何も言ってこない。となると、子どもの気持としては、約束を守ってくれたことになる。案外こんなところではないかと思うのです。でも、このように対処すれば、何時も上手くいくというものでもない。このところが難しい問題なのです。

「発達」についての締め括りに入りたいと思います。6)をごらん下さい。資料には四つの箱が書いてあります。この中に、発達を矢印でイメージして書き込んでほしいのです。皆さんが掴み取っ

「発達をあなたならどうイメージ化するか（矢印でどうぞ）」

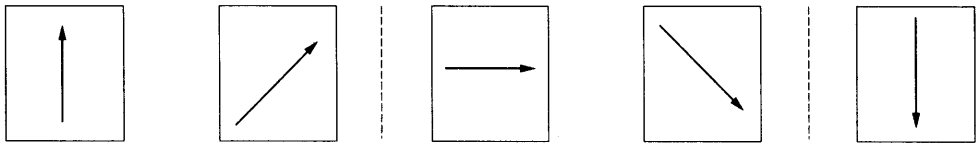


図 3

た発達はどんな矢印で表現されますか（各人記入）。今日の話は、このイメージ作りの話をしようと思っているのです。私が予想した皆さんの矢印はこうだと思うのですが、いかがですか（左側の2つをまず板書）。でも、発達というのはこれだけなのでしょう。人生を振り返って眺めてみればこういうこともあります（中の2つを板書）。さらに、こんな発達だってあるのです（右端の板書）。まさか、そんな嘘を…という訳ですね。だって、矢印が下がるといえば、良いイメージは持たないでしょう。でも、よく見てごらん下さい。目の前にいる我が子は思春期で学校に行けなくなっている。学校に行くという矢印が左端だったら、行かないのはこちら右端ですよ。じゃあ、この子はおかしいわけですか。おかしいと決めつけるのは誰ですか。本人ではないでしょう。でも、確実にこのA君にとっては、A君の人生の中では、間違いなく発達の一プロセスなのです。必要な後もどりのかもしれません。この認識が大人の側にできたらいいと思うんですよ、本当に。矢印が横に行くのはまだ我慢できる。しかし、下向きでは……。病気だったら行けない。行こうと思っても、熱が出てくるわけですから、無理をして行くと熱はぶり返すわけです。全く行けません。だから、下向きの矢印が発達の一部になってもいいのです。この場合の良い例は、夜尿症です。赤ちゃん返りでおねしょが出る。これはすぐ分かるんです。それは、下にお子さんができて、いままでは上のお姉ちゃんお兄ちゃんが、全部お母さんを一人占めしていたのに、急に駄目になったからなのです。この10月初めにある保育園でこの話をしたのです。やっぱりすぐに質問がありました。「私の子どもが、どうしても最近おかしいのです」お母さんの様子を拝見したら、どうもお腹が大きくなっておられたので、“お母さん、おめでたですか？”と言うと、「ええ、近々」と答えられました。絶対にそれまでの扱い方と違ってきているわけです。失礼な言い方かも知れませんが、そこに0.5人の存在者がいるわけです。それを3・4才の子どもは敏感に感じ取っているのです。この気持のようなものは、思春期だろうと、青年期になろうと、大人だってあると思うんですよ。あって当然のことということで、話を進めて行きたいと思います。では、これがどうして大切な発達なのかということを考えていきましょう。これで発達編は終わりとし、今度は、自分とは一体何者なのかの編に入ります。

2. 「自分とは一体何者なのか」について考えよう

配付資料 その2

- 1) 自己受容と他者受容について
- 2) 心内化プロセスと継承化プロセス——人生と人生周期のテーマ——
- 3) 心をどう捉えたらよいか——かかわりの次元より——
 - ①河合隼雄の内的理解と外的理解……「心の勝負は51対49」
 - ②国分康孝のカウンセリング・マインド
 - ③江幡玲子の家庭内暴力への取りくませ方
 - ④竹内常一の「子どもの自分くずしと自分づくり」
 - ⑤松原靖子（中学生教員）の生徒との接し方……包容—激励—注意（見守りながらの）
 - ⑥村瀬 学の「成熟」の受け止め方

先ほどの紹介にありましたように、私は今、人格心理学に頭を突っ込んでいます。臨床の方もボツボツやってきています。私はいつも思っていることがあります。私はどうして人間に生まれてきて、何で私はここにいて、私はどうやってあの世にいくのだろうか、まあこういうことなのです。つまり、私は一体何者なのだろうかと思いつけているのです。そして、今のところ“これしかないかな”と考えるようになり、私はかなり楽な気持ちになってきています。それは、『自己受容と他者受容』です。この言葉はどこでもよく出会うものですが、これを平たく表現すれば、あなたは人を信頼できますか。あなたが人を信頼でき、他者を受け入れられるようになったとき、あなたは出来るのです。つまり、人を信頼でき、他者を受け入れられるときには自己受容が出来ているのです。逆も真なりで、自己受容が出来てくると、人を信頼でき、他者も受け入れることが出来るということです。この原点についてはエリクソンが触れています。それは、私達の人生の一番最初にあるのです。お母さんの懐のなかに抱かれている、あれが一番いいわけです。もう少し深入りすると、お母さんのお腹のなかにいる時が一番だったのです。そうなのです。あそここのところで、私達は人を信頼するというのを、体で受け止めていたのです。これをベースにして、我々は他者を受け入れてきた。他人を受け入れることができるから、それとひっついて自分も受け入れられたんだと。このように考えたのは、40歳を越えてからです。私が20代～30代に何を考えていたかと言えば、“自分つまらない者だ”という事でした。どうしてそのように思うようになっていたのかはよく分かりませんでした。でも、その頃は皆そういう風に思うのかもしれないですね。大なり小なり。

思春期になった時、体が変わる。今までの自分とは全く違って来る。性的な成熟が始まるし、体つきが変わる。運動能力が変わる。そしたら、子どもは一体どう考えるでしょうかね。その時に、私達大人は、適切なアドバイスを子どもに与えているのか。私達がやっているのは、偏差値だとか、知的能力だけを気にかけているにすぎない。その子どもの情緒的な恐れとか、不安とか孤独とか、

そういうものには目が向かない。でも、子ども達には、こちらの方がはるかに大切なのではあるまいか。そこで起きている、体を通して変化してくる自分を見つめていて、何に驚いて何に震えているのだろうか。このところをしっかりと考えてやりたいのです。私達は意識のレベルで日常生活をしています。昨日何を食べたかは覚えています。でも、1年前の昨日何を食べたかは覚えていません。生まれた時、母からどんなことをしてもらったかは全く覚えていませんね。これら忘れてしまったものは、どこに行ってしまったのでしょうか。フロイトやユングに言わせれば、無意識の世界があるのだということになりましょうか。心のなかの無意識の世界が何処にあるかはわかりません。昔経験した多くのものが、何処にいつてしまったのか分からないからこそ、これらを無意識で括っているのではないのでしょうか。この訳の分からん世界が、急に目の前に広がり迫ってくるのが、体に変化する思春期の頃です。いろいろな知識は児童期を通して身につけてきた。しかし、自分の持っている知識だけでは、この自分の心や体の変化を上手く処理できないとしたら、どうなりますか。学校が嫌いだから、というだけではないかもしれない。先生が嫌いだけじゃないと思うのです。不登校は、案外自分が分からなくなっているからかもしれない。そうだとすれば、精神的な病ととらなくてもよい子が沢山いるのじゃないかということになるのです。自分と面と向かい、父や母と先生から戴いた自分では処理できない、そんな自分に気付いてしまったら、どうなるのでしょうか。これは、見方・受け止め方の投げかけですから、いつもそうだということではないのですよ。

私は、今何を考えているかと言えば、私の人生についてです。私の人生は、私の子ども達の人生とも深く関わっています。だから、「自分とは一体何者なのか」というテーマを人生と人生周期のテーマに置き換えてみました。結果的に、このように自分を見つめ直してきた。真っ暗闇の自分の心の中を覗いて、恐れおののきながらも、自分を見つめ続けてきた自分がここにあります。いろいろな事を自分なりに処理しながら、結婚して二人三脚となり、子どもを育ててきました。育てているときには、私達の思いはストレートに子ども達に伝わっていくわけです。自分のなかに取り込んできたものを、心内化プロセスとすれば、子ども達の中に見ている自分は、継承化プロセスということになりましょうか。このように見ていけるように私の心・考え方は広がってまいりました。私が今、此処にいるのは、ご先祖さんのお陰。そして私がいるからこそ子孫ができていく。私は大切な大切な一時期を担当しているのですから、そこに私の生きがいがあるわけです。このように考えていけば、どうです、繋がっていくでしょう。

では、このように捉えていく心を、私はどうやって自分の中につくってきたのでしょうか。私の考えを創り上げるために、私と同化（心内化）した6人の方を紹介してみようと思います。

まずは、河合隼雄さんです。自分のなかに潜む心に気付いた思春期の子どもを、どう受け止めるかというときには、私達は河合隼雄の次の言葉を貰うべきだと思います。つまり、『内的理解と外的理解』という言葉です。ヒルティの言葉で言えば、この子は何で二度風呂に入るかという時、言

えるのは二度入浴することだけです。それがおしゃれとか何とかとは関係ないんです。あいつはおしゃれだから、2回も入るんだということは、自分の持っている枠組みで言っているのです。これは外的理解です。自分が勝手につくったもので判断しているのです。「お前は何も気付いていないから、知っているわしが教えてやるんだ」式の言い方です。これはいらんおせっかいです。そうではなくて、どうして悩んでいるのか、なぜものを言わないのか、それをじっと観ていたら、子どもはサインを出していることが分かります。体中でサインを大人に送り出しているわけです。本当はとことん聞いてもらいたいという気持があるんです。その折、お父さんが疲れていたり、お母さんも日常生活で疲れてイライラしていたり、子どものことでお手上げになっているから、そのサインを見逃してしまうんですね。このサインさえ確実に掴み取っていたら、多分そこところからさりげなく話が始まることでしょう。だから、『仕掛けて待つ』のです。何はともあれ、相手の気持を直接聞いてみなければ何も分からないし、始まらない。“どうしてあんた学校に行けんのかのう”と言うでしょう。そしたら、聞いてもらいたいのですよ。でも、どう言って聞いてもらったらよいのか、そのきっかけが掴めない。だって、親が何時も言うことは、“ちゃんと理由を言え”とこうです。理由がうまく言えない場合はどうなるのですか。そうです。相手の枠のなかで考えてみる努力をすべきなのです。これが内的理解です。こうなれば、親の出番はあります。先生の出番もあるでしょう。河合氏は駄洒落の名人、彼のエッセイは面白いですよ。『押して駄目なら引いてみる』式の語り口は誠に心地よく、私達の固定観念を砕いてくれます。ここで取り上げたいのは、心の勝負は51対49というエッセイです。今日の前にいる子どもは、もうそうになっているのですから2対0です。ところが、これは表向きなのです。本当の心のなかに入っていくと、それは51対49という位きわどいものだという訳です。不登校になっている気持は、そうになっているのだから51です。でも治りたい、学校へ行きたいという気持も49あるはずだと彼は言うのです。ここのところを、我々はどうか考えてみるかです。子どもが今51対49で思い悩んでいるのなら、私達大人は手を差し出すことができるんですよ。2対0では相手はできません。河合さんのケースで、ある時、学校へ行けない高校生が親に連れられて来た。パッと椅子に座り、背を向けた。先生は永い経験から、このような子はやり易いとおっしゃる。だって言葉でなくても、態度で心を表していると読み取っている。

“あなたは、私とは話したくないほどこいやな思いをしたのだろう”と言うと、「そうだ、／＼」となる。「わしは、来たくはなかったのだ」と言ったとか。ここには治りたいという気持が49もある。でも、行きたくない自分を確保するための強がりがある51もある。どうして病気になったのですかね。やっぱり、それは必要があったからでしょう。そう成らざるをえなかったわけはちゃんとあるのです。それではどうすべきか。うつ病患者のプレッシャーを思い出して下さい。励ますのではなくて、じっくりと耳を傾けることこそ大切なことなのです。

国分康孝さんは、ここのところを『カウンセリング・マインド』という言葉で話しかけます。カウンセリング・マインドとは何でしょうか。①「治そうとするな、わかろうとせよ」：治そう治そ

うとするから分からなくなる。分かってやりたいと考えて接すると観えてくる。その子の様子をじっくりと観ているわけだから、その子の出しているサインに気が付く。②「ことば尻をつかまえるな、感情をつかめ」：何でこの子は今激怒しているのか。それを掴むためには、ことば尻では駄目なのです。ぐう〜んと一回こらえるのです。本当は手が出る位頭にくる。でも一度これをやったら、子どもはもう何も言わなくなる。私の息子もしっかり数えていました。15年経っているのに、小さい頃お尻を何回叩かれたかを。よくぞまゝこれほど覚えているという位数えておりました。思春期の子にはとても無理な対処法です。このグーッとこらえるところにカウンセリング・マインドがあるみたい。私達はこのことを日常生活の中にどう生かしていくべきなのか。自分の気持は飲み込んで、相手の気持を思う心に切り換えて、相手を観る。相手が何か言い始めたり、やり始めたりしたら、相手の持っている枠の中に入りこんで話を聴いてやる。こういう体験を一遍でも味わったらもう違いますよ。やってごらんなさい。私はやったことがあります。成功半分、失敗半分、未知数半分……？ちょっと計算が合いませんね。でもこんなものでしょう。

江幡玲子さんは、長いこと警視庁でケースワーカーをされました。彼女が勤めておられたときは、校内暴力から家庭内暴力に切り替わった頃だった。今は、ある短大で研究所長をなさっていると思います。この方が書いた本は面白かったですよ。「思春期暴力」という本の中に載っているのですが、家庭内暴力への取り組みせ方が書いてあります。ひどい言い方なのですが、この方の温かさはヒシヒシと伝わってきます。『人生に挫折はつきもの、そしたらお互い悩みなさいよ』親は悩まないという。受けてみろ、真剣に子どもを受け止めてみよと言われる。何のことでしょう。自分と他人の心、つまり、人間の心を知ることが大切なのだよ、お父さん、お母さん。自分の命をかけて、子どもに本気でぶつかったことがあるのかと言われるのです。殺されるかもしれないと思っても、対峙することがいるのだそうです。これ位の決心をしてぶつからないと、思春期に入って問題といわれる行動をみせた子どもには、伝わらない何かがあるのです。さあ、こういう時に我々大人は、この子にどう当たっていけばいいのか。まずは、親としての自信を持つことだそうです。皆さん自信をなくしている。自分の子どもが問題行動を起こすとは思ってもいなかったのに、現実はそうになっている。私達の子どもの限って……と思っても、現実目の前にある。そんな時、親はどんどん自信を失うものです。私の育て方が悪かった、間違っていたのではないかと。それはそうかもしれませんが。でもそんなことを言ってみても、どうにもなるものではない。今、此処でどう子どもに対処すべきかといえば、本気でぶつからないとそのチャンスのをがし、駄目になるかもしれない。一日延ばしたら、その溝はズルズルと大きくなるかもしれません。今此処こそチャンスなのです。さて、言うのは簡単。やるのは大変です。だって命がかかっているのですから。

竹内常一さんの『子どもの自分くずしと自分づくり』という言葉は知っておいた方がよいと思います。今までの自分、親から貰ったもの、先生から言われたような自分というものを、もう一回くずして、本当にそれに対面して、もう一度つくっていくんだ。どう言うことかといえば、意識レベ

ルの生活だけじゃなく、無意識レベルに気付いた、この心のレベルにぶつかったその子ども達は動転する。その意識と無意識の世界の心とを、どうやって繋ぎ合わせるかということが問題となってくるのです。私達大人は、このことを何とかやり遂げてきたわけです、いつの間にか。思春期の子は、もろに今直面しているのです。無意識の、ものすごく訳の分からない奥の深いところで、溺れそうになって生きているともし考えたら、私達はすごく彼らのことがいとおしくなるはずです。

“頑張って、そらちゃんとはい上がってこいよ”と言ってやりたくなるではありませんか。このことをユングは、『意識と無意識の相補性』(板書)と述べています。我々の日常生活にとって、この無意識というものも大切な一要素なのです。意識との間で補い合いをしていかなければならない。これもやっぱり、人生のなかでやってるわけです。これは、ユングから貰った貴重な私達の言葉の財産です。これを自分の生活にどう持ってくるか。さあここですよ。私という人間は、意識のレベルだけではないのです。無意識のレベルもあるし、むしろこっちの方が多いのです。訳の分からない自分が、そういったものを訳の分かるものにしようと、大人になっても努力してきているわけですね。思春期の子どもも、その入口に入ったわけなのです。この追い求めているものを、どう表現すればよいのでしょうか。ユングの言葉で言うと、『全体性の回復』ということ(板書)。全体性、私、自分、自己というものの回復なんです。今、目の前で、自分が分からなくなっている人がある時、それをどうやって全体性の回復へ持っていくのか。これは一人では出来ないのです。私達は、その人に手を差し延べてあげる役目があるはず。このように考えていくと、目の前で苦しんでいる子どもは、自分を高めるために苦しんでいると思う方がよい。病気になった、もう駄目だ、と言うのじゃなくてね。親または教師は、それ位の思いでいいんじゃないのかな。本当に病気だったら、それは精神科の先生に頼めばいいのです。そういうことと併用させながら、やっていけばよいのです。私達大人、教師、親だったら、こういう風に信じて、子どもとの関係を持っていった方がよい。子どもの方も、この方を求めているはずなんです。

松原靖子さんは、鳥取県の中学の図工の先生です。クラスの子どものなかに、恵子さんという子がいて、少々つっぱっていた。ただし、一匹狼的なお姉さんだった。恵子の家庭環境は複雑で、母は彼を産むと実家へ戻り、父は後妻を迎え、彼女は親類中をたらい回しにされ、もの心ついた頃は、お婆さんと二人で父親の家の隣りに暮らしていました。父親は恵子と一緒に住むことはなかったのです。恵子の部屋には、三点セットとか、何でも揃っている位、祖母を通じてお金は渡されていた。窓の隣りからは、夕食時に笑い声や叱る声が聞こえてくる。父親が松原先生に会うときの決まり文句は、「子どもに不自由はさせておりません」だったら、何故彼女は問題行動を起こしたのか。彼女にその気はなかったけれど、売られた喧嘩を買って出たのです。そして警察に補導されてしまった。彼女を引きとりにいったのは、松原先生と叔母にあたる人でした。事件の前、家庭訪問をした時、先生は何気なく窓を開けた。すると隣の父の家のざわめきが耳に入りました。恵子の激しい憎しみに共感したそうです。警察での彼女はシラーッとした顔をして背を伸ばし、何を言われても

口を結んで平然としていた。15歳の心は冷え切って氷の塊のようにになっていた。とうとう松原先生は頭に来て、父親を学校に呼びつけて差しで話し合ったのです。「お金を与え、不自由させていないというだけでは、子どもにとって十分ではない。それよりも、父親らしい心で接してやって下さい。どうか…」そう言いながら、しまいには恵子の悔しさ、苦しさを実感としてわかる思いで涙がにじみでてくるのを禁じ得なかったと記されてありました。その結果は一体どうなったのでしょうか……。これが一発で決まってしまったのです。何が起きたのか。簡単な事だったのです。道である日二人がすれ違った時、父は恵子に声をかけました。“待てや恵子”「——」“小遣い持っとるか?”「——」(無言で頷く彼女に)父親は、“足るか?”とやさしく言ったのです。「足るか足らんかわからんけど、足るようにしてるけえ」と恵子がそう答えたところ、“そんなら”と父親はポケットから二千元取り出して恵子にやったのでした。貰ったお金は二千元です。しかし、彼女は父から手渡しで初めて小遣いをもらったのでした。彼女はこれがきっかけとなり、立ち上がりました。父親と話し合いを重ね、ついに大都會の看護婦さんになっていきました。ものすごい話ではありませんか。お父さんにはこの子との接し方が分からなかった。松原先生が何かの代わりをして、とうとう大変身してしまった。父も娘も。松原先生のやり方は、『包容—激励—注意(見守りながらの)』なんですね。

村瀬学さんは、京都府の田舎で施設の先生をなさっている方です。「子ども体験」という本の中に、次のような図がありました。この絵でもって、私達の人生を見ていきましょう。格子のように描いてある上の世界とは何でしょう。また、点々

で示されている下半分とは何か。つまり、共同性と自然性が表されています。下の方は、包の世界体験だそうです。これは、お母さんの懷で暖かく見守られている世界、つまり、自然のなかで育つということのようです。そういう心の側面です。

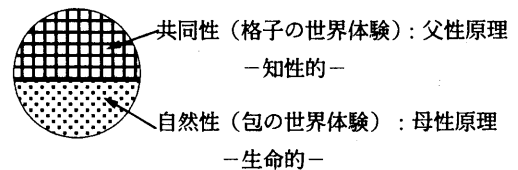


図 4

上の格子の世界というのは、覗き眼鏡で一所懸命外を見ているということでしょうか。共同社会が創り上げてきた文化遺産を、学校の中で学びとっていくわけです。だからこれを格子の世界体験にしているのでしょうか。図の横には、父性・母性原理と書いています。この図を使って、子ども時代から、死ぬまでを考えてみようではありませんか。4つのマルがあり、そのうちの2つは白抜きになっています。子ども時代と大人を図のように表した場合、ここで話になっている思春期～青年期の人達の心をどうぞ描いてみて下さい。また、一番右端の『成熟』とある部分に村瀬の考えたものを描いてごらん下さい。(思春期から青年期の部分は、村瀬にはありません)子ども時代の格子の世界はすごく小さい。ほとんど野生児(いい意味の)ですから、極端に言えば、自然のなかで生活している。例えば、幼稚園などで子どもに絵を描かせたら、自由に延び延びと描くでしょう。自由画といって、家より大きい花を描いたり、動物がものすごく大きくてもかまわない。お父さんが

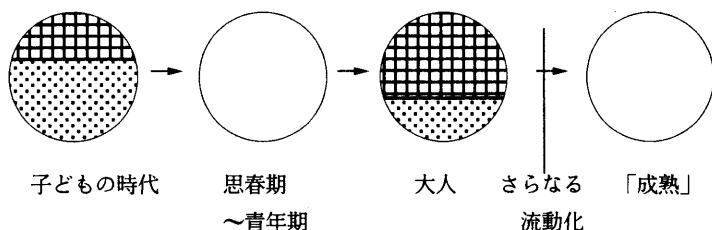


図5

小さくて自分が大きくてもかまわないのです。ところが、小学校に入ったら、絵の苦手な子が急増します。“そんな描き方はない、よく見て描きなさい”と注意を受けるようになっていく

のです。共同生活を学校では教えているからです。さて、そうなると、思春期から青年期のときは、これ位でしょうか（板書）。共同性というか、学校で学ぶことも大分分かってきた。ところが、自分の内にある包の世界、つまり、自然性もまだまだ十分に存在している。この自然性との付き合いがすごく大変なことなのではないでしょうか。例えば、本能的なもの、性的衝動など一杯ある。こんなものを全部押え込んで、学校で座っている。あの子達、とても偉いとは思いませんか。だって、巷にはセックス産業が氾濫しているのです。TVを観ればみたで今はストレートです。こういう中で、大人へと成長していくのです。大人の世界は知的な世界、つまり、共同性がメインです。これでもって、子どもに一所懸命何かを言い続けているのです。「あんたらは」とか、「お前達」とか「人生とは……」と言うわけです。でも、やっぱり大人は、子どもの気持ちになってみないといけないと思うのです。違うんです、自分たちの見ている世界とは。大人はほとんどもう理づめでやっているのです。しかし、子ども達には、感情的な揺れ動きがあるわけなのです。では、この辺をどう埋めるかです。ちょっと前まで

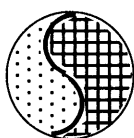
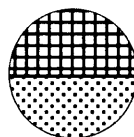


図7 「成熟」

成熟というのは、大人のものが基準として受け止められていた。でも、村瀬はそうではないと言うのです。私達大人は、もう一度考え直さなければいけないので



思春期
~
青年期

図6

す。では『成熟』をどう表すか。ヒントは窓ぎわのトットちゃんです。彼女が通学した小学校を知っていますか。巴学園に行ったんです。ここでも巴にしてみましょう（板書）。神社には三つもある。三つ巴、なんで巴にするんですかね。この図柄の中に深い意味が込められているのでしょうか。大人もまだまだ伸びていけないといけない。大人も死ぬまで、子どもから教えてもらうことが一杯ある。では、目の前で子どもが問題を見せた時どうするか。ここで問題行動は心の証（サイン）という捉え方について考えてみましょう。

配布資料 その3

- 4) 問題行動は心の証（サイン）という捉え方について
- 5) 青年期の子どもをもつ母親と父親が取るべき態度について
- 6) 精神的に疲れた場合に『休む』ということの意義

教師とか親には、一つの理想像のようなものがある。自分が出来なかったことも混ぜ混ぜにした理想像があるので、その像に添って、わが子に、この子に何かをやらせようと試みる。自分には出来なかったのに期待を込める。そのやり方は、“お前には、今はわからんだろうが、絶対にこうすればいいからやりなさい”と押しつける。でも、その通りにはいかなかったし、多分今回もそうはいかないかもしれない。こういうやり方・言い方を、親とか教師という大人はよくやってしまいます。でも、それとは違ったアプローチをする大人もいるのではあるまいか。「ええよ。ええよ。道草をしてもええよ。人生は長いんじゃない、4・5年位どういふことはない。それ位簡単、簡単」こういう大人との出会いをした子ども達は救われるのです。得をするのです。親がそのように対処できないのなら、親はそういう人を探せばいいんです。ここに、カウンセラーの存在意義がある。カウンセラーは、何よりもまず、その人を十分に受け止めてあげ、その子の気持に共感します。『受容と共感』のことです。それから少しずつ相手の心を開いていく、理屈をこねるのはずっと後のことなのです。だから、子どもが問題行動を見せるということは、考えようによってはとても有難いこと、チャンスという位のものです。このチャンスは生かすべきです。大人である私達も、その機会に伸びることができるからなのです。子どもが、本当の自分の心を覗かせたんです。覗かせたものは、有難く貰うのです。ここからが大切。マニュアルはありません。マニュアルがないから、自分たちで工夫していくしかない。それで分からなくなって困ったら、相談すればよいのです。いろんな所へ行って、そして、最終的には自分の責任でもって、自信を持ってわが子とちゃんと対峙するのです。今までの自分のやり方・躰け方・子育てが間違っと思ってもいいんじゃないですか。そう気付いた今から変身すればいいわけです。言うのは簡単、行うは大変です。でも、是非やってみるべきです。やって成功した時の喜びは、すごく大きいですよ。だって二人いや三人が、家族中が変わるからです。騙されたと思ってやるべき価値は十二分にあります。

青年期の子どもをもつ母親と父親の取るべき態度について、私も真剣に考えてきました。一つの結論は、親が自分を取るか、親が子どもを取るかです。子どもを取ったとしたら、それは自分を捨てたことになるけれども、それは嘘です。子どもも取って、自分も取ったんですよ。そのところを親が分かるかどうかなのです。だから、その一瞬に思いを込める時には、子どもの様子をじっとよく観ることです。そしたら、多分打つ手はあるんです。子どもが、助けてくれと言っているんです。その時、それに敏感に反応するには、自分のなかに不安とか恐れがあっては駄目なのです。子どものことを、全身全霊を傾けてジ〜ッと見つめ続けるのです。それには、心の中に余裕がいる。このように考えながら、子どもと接していこうという訳です。青年期の子どもをもつ父母についてイメージしたキーワードを紹介しましょう。私はカウンセリングをやっていきながら、あるお母さんと話し合っているうちにフ〜ッと浮かんできた言葉があるのです。別にスラックスでも何でもよいのですが、お母さんらしいので、『心の中のスカート』（板書）です。いつまでもいつまでも抱き込んでおきたい気持はよく分かります。しかし、一度は手を離すべきです。離そうとしても離れる

ものではありませんから、安心して親の方から離れてごらん下さい。しっかりと自立している子どもは、決して離れはしません。しっかりと依存することを身につけているからです。心の中でひっついておればよいのです。心のなかで、子どもはスカートの裾をしっかりと持っているわけですね。お母さんと子どもは以心伝心ですから、お母さんが不安なら、子どもは全面不安なのです。思春期の子も同じことです。そうすると次のようになりました。“今は秋、まる一日お母さんが家から外へ出て、楽しんでいらっしゃい。久しぶりに楽しい思いをされたなら、そのことはちゃんと心のなかのスカートの裾から伝わっていきますよ。今の状態では、お母さんの顔を見て、自分もしんどくなって、子どもさんは離れられないのではありませんか。”と私は言ったのです。これを即実行されて、そのお母さんは心底本当に久し振りに楽しめた。そこから状況は急変したのです。この事例をもとにこの母親へのキーワードは作られました。お父さんの場合は、河合隼雄氏の借り物なのですが、これしかありません、『壁』(板書)です。壁というのは、親としての壁なんです。子ども達は、何処までやったら拒否されるものか分かりません。だから、とことんやってみる。よく見ると、とことん限界近くまでやっている。行き過ぎると人をも殺してしまうことがある。これは行き過ぎです。その前に止めるべきなのです。向かってくる子どもに、親は立ち向かえということなのです。今、子どもが立ち向かう相手は、ほとんどが母親。家庭内暴力などでいじめられているわけね。でも、その場合の多くは、父親が逃げている。お父さんが立ち向かえばいい状況のときに、どうしてよいか分からない。だから、壁になれというのです。それは、心の壁になるということなのです。だから、チャンスと見たら、くり出すのです。もちろん子どもは乗ってきますよ。その折、お父さんの話が聞きたいと言えば、とことん付き合ってやるのです。くやしとか苦しさとか、何でもいいから相手をするのです。そしたらどこまで押してよいのか、どこから引くべきかが子どもにも分かってくるというものです。そんなところから、自分の心の中にポツカリと口を開けた無意識との対処の仕方とか、これから何十年か先の無意識の恐いところを、お父さんの分厚い心に触れることによって何となくでも分かる。こういった考え方なのですが、いかがなものでしょうか。

こうなってくると、精神的に疲れて、本当に首をつろうかと思っているいじめられっ子とか、学校へ行けなくて、本当は行きたいから夜寝るとき枕元に出かける準備をしているその子どもたちに、私達大人はどう声をかけたらいいのでしょうか。私は、声をかけなくてもいいと思うんですよ。精神的に疲れた場合に、『休む』ことの意味です。心の癒しに求められているものは何か。ここでは三つしか紹介できません。①「仕掛けて待つことの大切さ」：仕掛けて待つのです。何も手を打たなかったら、それは放任ですからね。②「温かく関与しながらの見守り(信じて待つ)」：“お母さん、このお子さんの不登校は一年かかるかもわかりませんよ。”と言われたとしましょう。「ええっ…」というわけで、「明日治るというわけにはいきませんか」と返ってくる。本当にそうやりとりをしながら、カウンセリングが経過し、半年後位に、「やっぱり、腰を落ちつけてやるべきですね」とお母さんが言った時、不思議なことに治って学校に出かけていったりする。そしたら、一

年かかりはしない。でも逆に、「半年はかかりませんと言ったけど、もう一年が過ぎた」と言われても、これは困りますね。だって、実際には5年も10年もかかるケースだってあるのですから、分かりません。3番目は、私から皆さんへのプレゼントです。③「ファンタジーの世界を大切に」：これはね。もう一度夢の世界に戻れということなのです。何もかもドライな世界に今生きているから、これを少しでも止めたいのです。ファミコン・ゲームもいいけれど、あの世界は人を殺すとか、勝つとか、勝利者ばかりです。確かに面白い世界だとは思いますが、もっといいかげんな世界、つまり、ファンタジーとかメルヘンの世界に入れと言いたい訳です。そんな子どもじみた……いいじゃないですか。子どもじみていても、私達は夢を見ているわけですから。『子どもが自然に育つのを本当に見守るということは、とてもエネルギーのいることなのだ』という河合隼雄の言葉を、やっぱりどこか身近なところに、しっかりと位置づけたほうがいいと思うんですがいかがでしょうか。力があるのです。いいですか、放任ではない、過保護でもないんです、見守るというのは。だから難しいし面白いのです。これはイマジネーションの世界なのです。

さて、私のレクチャーをまとめる時間となりました。二言で締め括ります。まずその一言は、北澤ご夫妻の言葉です。このお二人は、高校の先生を辞めて、今信州でカウンセリング塾をなさっておられます。全国から子ども達を預かっておられるけれど、まだそれほど沢山の子供達に接してこられたというほどには至っておられません。毎日新聞の余録に取り上げられていたので買って読んだ本の著者です。－「親子で光る」(P175より)－

- 1) 若い芽は不安・不信・批判のなかでは育たないのです。安心と信頼と温かい関心の中でだけ本当の育ちがあるのです。
- 2) 「いいなあこの子は」と親に思われている子はそのようになり、「だめな子だ」と思われている子は期待通りにそうなる。

このように思っただけで子どもと接していけば、いいのじゃないでしょうか。

二言目は感動的な話です。私はこの話を直接その長男の方からお聞きしました。三人の男の子を母の手一つで育て上げた、そのお母さんと子どもの実話です。その方の勤めておられる会館でビッグマリオン効果の話をしました。その話を聞いて下さったその方が、素晴らしいプレゼントをして下さったのです。「私の親がそうだった」と言うんです。私はとても感動しておりました。だから、今も忘れられないのです。真ん中の息子さんが少し知恵遅れぎみだったのだそうです。それで上と下と一緒にいじめたわけです。「何だ、お前は…」とか何とか言ったのでしょーうね。そのたばにお母さんは、「私の産んだ子どもに駄目な子はいない」と言われたそうです。そんなある時、お母さんはそのお子さんが、横文字に興味を持ちはじめたのに気付かれたのです。生活が苦しいのに、そのお母さんは、全財産をはたいて、なんとそのお子さんの為に英文タイプライターを買って上げたのです。その子は、毎日毎日英文タイプライターを打った。私の前に座っておられた長男の方が言われたのはこうです。「私達兄弟の中で、一人だけ大学に行きました。それも英文科に入り

ました。誰かと言えば、その弟です」これで私のレクチャーを終わります。長いこと、私の早すぎる話を聞いて下さり、有難うございました。

読んでみると参考になる本とレクチャーで紹介したもの

- 1) 東京都精神医学総合研究所 「思春期暴力」有斐閣 1983
- 2) 村瀬 学 「子ども体験」 大和書房 1984
- 3) 松原靖子 「怒るまえにボクの気持ちをわかってほしい」 筑波書林 1985
- 4) 西田真正 「一高校教師の人生観」大和書房 1985
- 5) 竹内常一 「子どもの自分くずしと自分づくり」 東大出版会 1987
- 6) 伊藤隆二 「こころの時代の教育」 慶応通信 1989
- 7) 石田一宏 「学校ぎらいにさせないで」岩波ブックレットNo.279 1992
- 8) 河合隼雄 「子どもと学校」(新書)岩波書店 1992
- 9) 若林 実 「アインシュタインも学校嫌いだった」筑摩書房 1993
- 10) 北澤康吉・美装子 「親で光る一素敵だよ登校拒否 part 2-」毎日新聞社 1993

収録再生記録：松島哲也 1994.12.20

加筆修正：秋山幹男 1995. 2.28